

令和6年度第1回日野町総合教育会議議事録

1. 日時：令和6年（2024年）7月26日（金）16時00分～17時00分
2. 場所：日野町子育て・教育相談センター
3. 出席者
堀江和博日野町長
日野町教育委員会：神川貴子教育委員、本居節子教育委員、
吉澤松美教育委員、村井優子教育委員
庶務：菊地智子企画振興課課長補佐
奥田直室長、正木博之教育次長、赤尾宗一不登校対応担当課長、加納治夫生涯学習課長、
平松久明図書館長、森弘一郎子ども支援課長、山中博嗣学校教育課主席参事
4. 傍聴人 0人

開会 （企画振興課課長補佐）

町長あいさつ

協議事項

日野町子育て・教育相談センターの体制と事業概要について

【町長】

それでは協議事項に入らせていただきます。

お配りした資料を含めてこのセンターの説明を宜しく願います。

【奥田室長】

子育て・教育相談センターの室長の奥田と申します。この4月から来させていただいております。それでは、資料に従いお話をさせていただくことにします。

当センターについては、平成19年度から開設をしております。当時は隣にいる赤尾と非常勤の心理士のみで活動を始めたのですが、平成27年度から室長というものを置いていただけることになり、現在に至っています。私が室長3代目になると聞いております。

他市町に比べると、ここはたくさんの心理士さんを雇っていただいていると思いますが、パートタイムですので実際に考えると4人程度ということになります。

それから、ことばの教室も併設させていただいておりますので、その指導員については、2名分の枠があるが、1名欠員で、1名のみでさせていただいております。

では2番目の事業の概要ですが、まず私たちは相談センターとっておりますので相談事業が大きいのですが、その相談の状況は、「ア 所属別 来所相談人数」を1番目に乗せてあります。ややこしいのですが、各年度の左側は実際に来ておられる実人数です。右側は対象の児童の数です。ですから一人の子どもに対して、本人、お父さん、お母さんと来られたら実人数は3になるということです。

なお、令和6年、今年度については4月から6月の数を載せてあります。

コロナが明けて、対象児童生徒数は増加したと私たちは見ております。今年度についてはなかなか見えないのですが、感覚として「大分増えているな」という感覚を私たちは持っております。特にこの7月、8月は予約が多く、夏休み中にうちにかかってくる子どもたちと保護者の方が多いなと思っております。

二つ目、「イ 面談形態別 延べ回数」を載せてあります。「来所面談」、「巡回面談」はこちらから、そして、「会議」、「保育」、「校園連携（個別）」というのは、うちに通っている子のケース会議ということです。「校園連携（全体）」というのは、うちに通っていない子のケース会議にうちが参加させていただいているということです。

大きな数になっていますが、特に言うべきことは、会議の回数が令和3年頃からグッと上がっているということです。コロナで会議が多くなったことと同時に、隣の赤尾が担当課長になったということで、その分の会議が増えたということです。

そして、校園連携、つまりケース会議が減ってきているのは、うちが開所して以来、学校に積極的にケース会議をしようと働きかけていたのを、段々うちが引いて、学校に主体的にケース会議を開いてもらおうと思ひ、こちらが我慢していたところもあったり、学校も校内でケース会議をしてうちを呼ばなかったり、それは良いことと言っているのですが、そういうふうなことがあるので回数が減ってきていると私たちは見えています。

電話相談が減ってきたのはもちろんコロナの影響だと思っております。

次のページの、「ウ 相談者別 延べ回数」については、見ていただいたとおりのお母さんの相談が多いということです。「その他」については、会議の主催者等が入っておりますので多くなっております。

「エ 主訴別 面談形態別 延べ回数」は、やはり多いのは「不登校」、「行き渋り」、そして「発達」、「家庭問題」、「対人関係」。これらのことで悩んでおられる子どもさんやお家の方が多いということがわかります。

少なくなってきたのは、上から4番目の「虐待」はかなり少なくなっています。これは虐待の数が少なくなったとは安易に言えないと思っております。これは、虐待は悪いことだと社会的に注目されてきたということもあるでしょうし、その反面、外へ出るのが駄目だとか、見えなくなったところにあるとか、そういうふうなものもあって少なくなっているのではないかと思います。反対に心配している数だと思っております。

最後、「オ 新規 相談ケース数（再開を含む）」は新規の相談件数です。相談は年度ごとで終わるわけではありませんので、年度をまたがってありますから、新規に入る相談の数だけを挙げてあります。令和2年度についてはコロナの影響で少なくなりましたが、大体新規50件前後です。今年度もこれからさらに増えると思っております。

以下に文章で、注意点や、特徴や傾向などを挙げましたが、全部読むわけにはいきませんのでいくつかつかいつまんで言いますと、先ほども言いましたが、今年度は特に不登校生の本人、保護者からセンターにつながってくるケースが増えてきたと実感しております。このセンターの認知度が町民の皆さんのなかで上がったのではないかと思います。困ったことがあれば、学校にも当然相談に行かれますが、ここにも直接来ていただけるケースになってきたと思っております。

昨年度から取り組みが始まった「誰もが行きたくなる学校づくり」の効果があり、長期の欠席者が登校を始めて、そのまま出席を続けたり、大体そういう子は息切れするのですが、息切れするまでの期間が長かったりする状況です。そして、新規の不登校生が少なめになってきているというのは良いことだと私たちはとらえております。

次の「成果と課題」については、学校や担任の先生といった各機関との連携を密にして、うちに相談に来られる頃には、かなり重症になってから来られるのが多いので、できるだけ早めに情報を掴むことが必要だと思っておりますので、そういう連携をとることを心掛けております。

次の「発達障害」についても、いろいろな子がいますので、学校や園では「それくらいのこと」ととらえていただいていたたり、保護者さんに「大丈夫ですよ」というような声かけもしていただいているのですが、やはり保護者さんにとっては非常に心配な内容が多く、こちらへ相談に来られて「学校では大丈夫だと言われたのだけれども実は心配で」というような保護者さんの声は非常に多いと思っておりますので、そこを学校と一緒に共有していくということは大きなポイントだと感じております。

「虐待」については先ほど申しましたとおりです。

「その他」については、先ほど主訴別で言いましたが、「行き渋り」だけで来るということはまずないです。行き渋りの影には家庭問題であったり、発達の問題であったり、いくつかのことが混在しているケースが多いということも知っておかないといけないと思っております。

では次に、うちの事業として大きく「検査」をしております。よく「WISC」や「新版K式」などと言いますが、大きく言いますと知能検査のことなのですが、その検査の数を挙げてあります。大体年間80件程度ですが、今年度は4～6月で30件、7月を入れますと40件になっております。今年はもしかすると100件を超えるかと思っております。おそらく他市町ではこんなに上がらないと思います。他市町はおそらく保護者さんが「ちょっと心配なので検査してほしい」というのは検査してもらえないと思います。それは機関の問題や料金の問題、心理士の数の問題などいろんなものがあると思うのですが、日野町は今のところ全部受け入れるという方向でやっていますので、こうやって上がっていくと思えますし、検査についてもハードルが低くなったのも良かったかと思っておりますので、このまま続けていきたいと思っておりますが、恵まれているとはいえ、やはり保護者さんと一緒に検査の結果を共有したりしようと思うと、仕事が終わられてからなど、平日の昼間に検査するのですが、そのときにフィードバックはできないなどのことがあり、心理士の勤務体制もいろいろ考えていかないといけないと思っております。

もう一つは、今は「WISC-IV」というものでしているのですが、全国的に秋頃から「WISC-V」にバージョンアップされたものに変わっていきます。その費用について、機械の購入、集計するためのソフトの購入、一人に一回ごとに用紙を渡して検査するのですが、その費用が大体一人1,000円かかり、全部公費で賄っています。先ほども言いましたが、100人になりますとそれくらいの費用が毎年かかってくるということにもなりますので、またいろんな方法を考えていかないといけないと思っております。

続けて3番です。「学校等連携（相談・支援）事業」も行っております。その担当と、次のページには連携している回数についての数字を載せてあります。各学校に400回前後出向いたりしております。先ほども言いましたが、学校だけでは抱えきれない問題もありますので、私たちも協力させていただいて、と思っております。

協力することで「教師から見る目」と「心理士から見る目」と多角的に子どもたちを見て支援していけるということが一番大きな利点かと思っております。そこで注意すべきことは、学校の見立てと、保護者さんの願いにずれがあるケースがありますので、そこについてはどちらの味方にもならないように、中立を保ちながら相談に応じていかないといけないということに注意しながら取り組みを進めています。できるだけこちらから働きかけるのではなく、学校が主体的に相談されたり、保護者が主体的に私たちに相談されたりというのをしてもらえようという努力をしていこうと思っております。

次のページについては、「保・幼・こども園連携事業」を同じくしております。就学前については福祉保健課の方で担当していただいているので、すぐということはないのですが、次に就学されるといふ5歳児、4歳児についてはできるだけうちも協力させていただこうということで、取り組みをしておりますし、特に「就学に係る4歳児の相談事業」については、うちでも観察や協議を主体的に行っているという状況です。

以上、子育て・教育相談センターとしての取り組みでした。次の5番目は、「日野町ことばの教室」事業についてです。

ことばの教室も皆さんご存じだと思いますが、日野町在住の4、5歳児で、発音がしにくかったり、言葉が出にくかったり、不明瞭であったり、そういうものについて、相談とトレーニングとをしております。

私もここへ初めて来させてもらったので、今までのことを調べてみましたら、開設して9年目になるのですが、9年間で116名の子どもがことばの教室を利用しているということがわかりました。この116名も、内訳を見てもみると、その内約1/3の子ども、40数名が今でも何かに支援をしてほしいと思っております。例えば支援学級に通っておられるとか、例えばここへ相談に来られているとか、そういうようなことがありますので、やはり早期に見つけてことばの教室でつながりを持っておくということはとても大事なことだと思っております。

ただ、療育がありますので、症状が重い子については誰が見てもわかるのですが、ことばの教室についてはいわゆるグレーゾーンというのでしょうか。療育にはかからないけれど、育てることやことばのことに何かという、そういう人たち、子どもたちの相談場所に、ことばの教室は大事なことなのではないかと思ひ、活動も進めております。それについては「入室指導」や「ことばの相談」、こちらから園を訪問したりなどの活動もしております。

ただ、5番目に書いたのですが、「指導員の複数配置」ということで、先ほど言いましたが2名分用意していただいているのですが現在1名で、できる限り個別に対応はしてもらっているのですが、個別ではなく子ども同士が言葉を言い合うことで言葉の力をつけていきたいと思ひ、ペア学習をしようと考えて2年ほど前から取り組みを進めてもらっています。しかし、やはりペア学習には一人の指導員では大変なので複数であたりたいということで、去年までは指導員が二人いたのでカリキュラムも作ったのですが、今年一人になってしまったので、できなくなっている状況です。できたらもう一名早く見つけて子どもたちのためにやっていけたらと思ひますし、週に一度うちでするだけでは足りないので、お家の方でもご家族の力を借りて言葉の訓練ができるように「きくきくプログラム」というのを作りまして、お家の方で「こうしたらどうですか」ということを、本当はことばの教室でははいけないことなのかもしれませんが、しかしやはり子どもを何とかしようと思ひるとこんなことも良いことかもしれないと思ひてさせていただいております。

次の6番目には、うちが参加、もしくは主催させていただいている会議について挙げてあります。非常にたくさんの会議が挙がっております。よく似たものもあるのですが、これらの会議に、私もしくは赤尾担当課長のどちらかが出席させていただいているということです。

最後の7番目になります。その他の仕事といたしまして、原稿を依頼されることがあります。今のところ子育て応援通信『ゆっくりおおきなあれ』と少年センターの『少年センターだより』に執筆を頼まれていますので執筆をしておりますし、その他、講演等講師派遣依頼がありましたらうちの心理士を派遣しているという状況です。

最後になりますが、「勤務・施設状況等」についての課題を書かせていただきました。かいつまんで言いますと、保護者のニーズ等に合わせますと心理士の勤務時間がうまくいかないということになるので、数年前より心理士についてはフレックスタイムを導入させていただいて、夜遅くなる場合には朝ゆっくり来ていただくとかの対応でさせていただいております。それでも相談業務は後を絶たないような状況ですので、超過勤務の実態の改善についてはセンターの大きな課題だと思っております。

そして、全国的な課題なのですが、心理士さんがいないので、探すのに非常に苦勞をしております。今うちの心理士は7名なのですが、そのうち2名については県外から、京都府と三重県から来ていただいております。毎朝車で通ってきてくださるのですが、ところが町の規程で言いますと、交通費が実際分らないのです。大体半額になってしまいます。京都の方から滋賀県へとなるとスタッドレスタイヤを買わなければならない、京都では必要ないので支出が大きくなります。そのあたりも見直しを図っていかないと、本当に心理士がここへ来てもらえないことになるかもしれません。給与面についても、他市町と大体同じくらいだと思いますが、他市町が上げるとなってくるとおそらく他市町の方に行かれるようになってしまうのではと考えており、町全体で考えていかなければならない内容かと思っております。

さらには、隣におります赤尾先生なのですが、開所当時から活躍していただいておりますので、うちにかかってくる電話も赤尾先生宛が非常に多いのですが、年齢も年齢ですし、長くいていただくということもありますし、後任と言いますか、できれば日野町在住の方が良いのかと思っておりますが、それについては見通しが今ない状況ですので、今の恵まれた相談業務を維持しようと思うとそれも考えていかないといけないと思っております。

次に施設面を考えますと、一つは狭い部屋であるということと、他の機関などと離れているということもありますので、全体的に施設面を考えていくのも大事かと思っております。このプレイルームなども、長い間休んでいる子どもたちにとっては一緒に遊んであげたりということは大事ですので、こういう絨毯の部屋が三つ、大・中・小とあるのですが、それだけを午後から使おうと思うといっぱいになりますので、今ことばの教室は幼稚園に行っておられる午前中に抜き出して行ったり、そんな工夫をしながら何とか部屋が埋まらないように使わせてもらっています。それも考えていかないとと思っております。

そして、中学校卒業後に個別の指導計画のファイルを持っている子がたくさんいるのですが、多い年だと学年で60人くらい、少ない年で30人くらいです。それだけ分のファイルがどんどん溜まっていくのをここで保管しております。ロッカーを置く場所がないというのが実情です。今福祉保健課などでそれをデータ化するように働きかけ等はさせていただいているのですが、そのデータについても非常にナイーブなデータが載っているものですので、保管、閲覧することについても大きなきちんとし

たルールを決めていかないといけないと考えております。保管場所と同時に、そんなことまで話し合える時が来ると良いなと思っております。

最後のページには、今言いましたことをまとめて、うちは今これだけの仕事をしていますということで図を載せておりますのでご覧ください。以上です。

【町長】

ありがとうございました。詳しくご説明いただいてありがとうございます。

それでは、ざっくばらんに委員さんの方から、ご質問でも結構ですし、日頃のそれぞれのお立場から関連するものでも結構ですが、先にここだけお聞きしても宜しいですか。

交通費はどのようになっていますか。

【正木次長】

通勤手当については、遠方からマイカーで来ていただく実態と、支給基準がマッチングしていないのが現状です。遠方の方は、公共交通機関で通勤していただく前提で支給基準が定められています。

もちろんタイヤ代はそこに加味されておりません。

日常の生活圏内では必要ないけれど日野に来るということだけで必要だということで、なおかつ、週に2、3回の勤務のためにスタッドレスタイヤを買わねばならないのはご負担ですね。

【町長】

何か良い方法があればよいのですが。

そして、やはり赤尾先生の後任ですね。今、担当課長として行ったり来たりしていただいています
が正規で、できれば日野町在住でということですね。中長期的に見ていくといずれ必ず直面する課題
ですね。近隣でおられれば良いのですが。

最後の文書管理のところなのですが、これはとても多くのファイルがあるのですか。

【奥田室長】

ロッカー4つ分です。二段に分けてファイルがびっしり入っています。

【町長】

そのファイルは時折使うのですか。

【奥田室長】

福祉保健課などに相談に来られて実は昔来ていたという話があると、福祉保健課の方が見に来れたりします。

【町長】

そのことを福祉保健課に話したことがあるのですか。

【奥田室長】

ネットワーク会議自体で管理しようということは決まっているのですが、置き場所にここを使っているというような状況ですが、うちでは使わないです。

【町長】

使わないのですね。

この間、文書を完全に保存してくれる機密情報を扱う会社に視察に行きました。このボックスを何万円かで、一箱をデジタル化して保存してくれるのです。必要な時は検索したら全部出てくるということなので、頻繁に使うものは手元にあった方が良いでしょう。年に1、2回あるくらいであれば、そちらの形でもよいかと思います。役場も今もう文書が多くていずれ保存できなくなる状態になっているのです。

【奥田室長】

昨日、その会社が総務課に来られたので私も呼んでいただいて、どういうものかというのを見せていただきました。

【町長】

どんな感じでしたか。

【奥田室長】

良いと思います。ただ、あまりにもナイーブな個人情報なので、そのあたりは気を付けないといけないのと、誰が閲覧できるかというのと、本当にルールはしっかり決めないといけないとダメですが、あれですべてうまく保存できると、これからさらに増えていくと思います。

【町長】

ここは本当に限られたスペースでやっていただいているので、ルールを決めて取り組みできるように、まずやってみようという話をしています。それが動くだけでも変わってくると思います。

私は以上です。では、神川委員さんから。

【神川委員】

私自身も子どもが小さい時からことばの教室からお世話になってますし、年間こんなに多くの方が来られていると聞いて驚きました。実際相談に来させていただいて、本当に親身になって話を聞いてくださるし、親子で解決ができるように一緒に考えて提案して下さったり、次に行ったときに前回からの期間の振り返りも含めて見て下さったり、学校にも行って下さったり、すごくありがたい場所で、私は最初に保育園でつないでもらったのでスムーズに入ることができたのですが、悩みがあっても、うまくつながらない方もおられると思うので、そういう方をどういふふうにつなげていこうかが課題だと感じます。

そして、心理士の先生の交代が多くて、そういう事情があったのだなとわかり、可能であれば同じ心理士の先生に引き続き見ていただける方がありがたいので、継続して仕事していただけるような環

境になれば一番良いなと思いました。

【赤尾担当課長】

やはり互いに心理士確保のしあいになっていて、良い条件を出されてくるというのが一つあるのと、うちでキャリアアップをして次のステージへと思われる方もおられて、その心理士の方にとっては良いことなのですが、うちとしては非常に辛い。以前「ここに長年勤めるということのメリットが出てきたら良いな」と話していました。来た1年目からでも、10年いても同じ17,000円。例えば、2年目から少しずつ上がるとかであれば、もう少し居てもいいかなとなるのかなという話はしていました。工夫をしないと、うちで育てて外にとられるということが起こっているのが現状です。

【町長】

それはまた待遇の良いところへ行かれるのですか。

【赤尾担当課長】

そう思います。一番のネックは、不便だということです。近江八幡などなら募集をかけてももっと早くに申し込みがあるのですが、いくつもネックがあるので、せめて待遇が良くなっていくとかなれば良いかなと思います。

【町長】

ありがとうございます。本居委員さん、どうですか。

【本居委員】

そうですね、私もこの件数を見て、相談件数が年間すごく多いのだと実感させてもらったのと、今保育士さんにしても学校の先生にしても人員不足があったのですが、やはり相談センターでもあるのですね。子どもたちの育ちにとって必要な人たちはやはりどこでも足りていないのだと本当に改めて問題だと思うので、子どもさんにしても親御さんにしても「相談したい」というのが本当に増えているというのがありますので、その問題解決をどこもしなければいけないことだと、今日お話を聞いて実感させていただきました。

私は今ファミリーサポートセンターと、ぽけっとと行かせていただいている、実際に保護者の方のお話を聞くと、子育てに正解はないと思うのですが、皆さん子育てをしながら「この子の発達はこれで良いのか」、「これで合っているのか」、「これで大丈夫なのか」という正解みたいな答えを求めてこられることが、最近の親御さんは特に多いなと実感しています。例えば、ここのことばの教室の前に保健センターの親子教室に通ってほしいと思う親御さんに声をかけておられても、「訓練に行くんだ」という言い方をされたので、子どもさんの言葉や発達面でお母さんはこどもに訓練をさせるんだと思っておられるので、親御さんに対しては、もう少し子育てしていくうえで「親子で楽しく」ではないですが、日常のなかでそこが解決していけるような、そういう説明も必要なかなと思います。この相談センターに来られる前の段階というのも重要だと思いました。

今、0、1、2歳の子どもでも、発達の面にしても言葉の面にしても気になるお子さんというのは以

前よりも多いと思いますし、言語が一語二語出てこない時期でもお母さんはどうしたらいいのかというのは説明はされていると思うのです。何度も相談に行かれていて、保健士さんからの説明はされているのですが、どうしても自分がどうしてあげたらいいかがわからない。やってすぐに結果が出ると思っておられることも多いので、子どもに言葉をかけたらそれがすぐに言葉として返ってくると思っておられる方も多いので、そのあたりはお母さんにうまく伝わらないのかなということもあります。

子どもさんのことなのですが、小さい頃からお仕事される方が増えてきたので、親子教室に関しても平日の昼間にあるとどうしても仕事があるからということでお母さんが断られるということもあります。

あとはお母さんが「そのうちに何とかなるよ」と仰られる方もあるようなので、相談に来られて実際につながっていく方は良いのですが、つながっていかない方も実際はおられるので、この件数以上にあるのかなと思います。

そのあたりもまた色んなところと連携しなければいけないですし、そうなるもまた数がどんどん増えていくのでなかなか難しい問題だと思うのですが、やはり最初の時期からのことが重要だなと、今日お話を聞きながら改めて実感させていただきました。

【町長】

ありがとうございました。

先生からコメントはありますか。

【赤尾担当課長】

まず共通するのが、「スイッチを押したら良い答え」みたいなところが保護者さんにもあるので、言われたように、「一度教えたら言葉を上手に話せる」、そんなわけではないので、その葛藤に耐えられない大人も増えていると思います。そこにはちゃんと誰かが寄り添ってくれて葛藤やモヤモヤを聞いてあげられる人が私たちや心理士の役割だったり、学校の先生の役割なのかなと思います。もう少し話し合える関係ができると良いかと思いました。

【町長】

吉澤委員さん、どうですか。

【吉澤委員】

まず質問なのですが、一枚目のプリントの相談事業の「①相談状況」の表なのですが、ここの「所属別 来所相談人数」のところ、「その他」というのはどういう人になるのですか。

【奥田室長】

これは中学校を卒業して、高校生になってからも相談に来られている子たちもいますし、特別支援学校に行っている子たちもおられます。

【吉澤委員】

あと2点感想等を申し上げたいのですが、子どもたちは学校というところに席を置いていて、学校の先生が関わり、指導していただいている中で、こちらのセンターの方でも子どもたちの対応をしていただき助けていただいて、非常にたくさんの相談を受けていただき大変だと思います。

その中で心理士の問題が出てきましたが、やはりこれは構造上の問題があるのではと私は思っています。「公認心理師」となっていますが、以前は「臨床心理士」という資格の方がおられて、最初の単価がフリーで高い設定になっていたのですが、それがずっと続き、この業界はそうなっているということです。フリーの専門職でその職が求められる状況になってくると、やはりそういう傾向になっていくと思うのです。臨床心理士の方が広く活躍されるようになる以前にも、看護師の世界でも転職が多く、条件の良いところへどんどん行かれるという話も聞いたことがあるのですが、臨床心理士さんの世界でもフリーが良いということになれば、お金もあつた方が良いでしょうから、待遇の良い方に行かれると。極端な話フリーアナウンサーみたいなものですね。社員のアナウンサーからフリーになれば数倍の収入になると。ですから、もてはやされる職業はフリーで単価が高いと。ここはやはりある意味では国のレベルで、大きなところから制度を変えていただくようにならないと田舎の町は大変です。この一つの町ではどうしようもない、そういう業界の実態がありますので、これは仕方のないことでどうにもできないと思います。そういう職種がいくつかありますからね。これも大変お困りだと思います。

そのなかで、この心理的なサポートはとても大変なことだと思うのですが、ここに上がっている主訴というのでしょうか、見ているといろんな課題に分類されていて、もちろん複数あるものもあると思うのですが、対応は臨床心理士さんから現在は公認心理師さんになっているのでしょうか。心理的なサポートはもちろん大事なのですが、仮に不登校にしろ何にしろ、心理面だけでは如何ともしがたい面もあり、その子のせいではなくて、関係性の問題が結構あるのではないかとということで、SSWというスクールソーシャルワーカーさんが、そういうところまで介入して調整して、何とか子どもたちの立ち直りや発達を支えようという方向性はあると思うのですが、そこの関り、相談センターもそういう機能を持っておられるのか、その部分はどのような形でサポートされているのかお聞かせ願いたいです。

【奥田室長】

心理士だからといって心理面だけ対応しているわけではなく、ソーシャル面についても訓練を積んだり、そういう話を聞くこともやっています。さらには日野町でもSSWの方がたくさんいてくださいましたので、そこの連携についても進めていますし、気軽にここにスクールソーシャルワーカーの方が情報共有に来られたり、私たちも出向いたり電話をしたりというようなことをしておりますので、一面だけで子供の相談にのっていることにならないように努力はしていくつもりです。

【吉澤委員】

ちなみにスクールソーシャルワーカーさんの担当はどこの部署ですか。

【奥田室長】

学校教育課です。

【村井委員】

以前いた小学校では、放課後、校内で言葉の教室があったんです。そこにはいろんなお子さんが行き、私はその発達障害の子の担任として一緒に参加してお話を聞いたりしたんですけど、何をどうしていかよくわからない。ただ、いろんなやっていることをそばで見えていました。その当時、私も勉強不足でその言葉の教室という意味自体がよくわかってなかったんですが、その後、その親御さんとの情報交流なども特にありませんでした。もう一つ気になったのは、そこは外国の方が言葉の教室という感じで結構来ておられました。日本語がうまく喋れないっていうのもあったんですけど、それにプラス、クラスの子に馴染めないみたいなそんな感じで、言葉の教室にそういう子たちも参加してたのですが、日野町はその辺はどうなんでしょうか。

【奥田室長】

そこは、福祉保健課や子ども支援課と協力しています。多くは子ども支援課で、どこでこの子はやってもらうのがいいのかという判断をされて、言葉の教室だとか、療育の方が妥当だろうとか、外国籍の子であれば日本語教室がいいのではないかなというような判断をさせていただいているのが現状です。なかなかきちっと線引きをするのは難しいことだと思います。

【村井委員】

日野町でもそのようなケースがあるのでしょうか。

【奥田室長】

外国籍のことはあると思います。ここに通ってくるのは言葉の教室ではなくて、相談事業の方にも外国籍の子はたくさん来ますが、日本語が通じない。このあいだ、私も「ポケトークを貸してほしい」と多くの課に問い合わせ、そんなことをしながら何とかやっています。

【町長】

その他、全体的にでもよいし、補足などありませんか。

【正木教育次長】

以前、私は福祉にいて、学校教育と両方を見せていただく中でだんだんと件数というか、いろいろなケースが増えてきて、この子育て教育センターだけのことでなくて、要対協のケースも複雑になってきています。そういう中で、町職員の連携というか、今のケースファイルにしても、できているようで、でも連携がしづらくて、それがこっちのファイルでしょう、教育相談センターはもういっぱいだからいりません、みたいにどうしてもお互いの立場で喋ると何も解決しないことがあって、昔はもうちょっと繋がっていたのになと思うのですが、やっぱり人も変わるし、体制も変わり件数も増えてきて、もう少し町全体を、地域共生担当ができた中で、もう少し連携していくのも大事なかなと思っています。

【町長】

アンテナが増えて、しっかりはれるようになって件数が増えたという側面もありますね。

【赤尾担当課長】

学校の先生たちが、気になる子を応援しようとお母さんたちにすすめてくれることになります。

【町長】

学校の先生も代わっていかれる中で、重要ですね。室長も言われた学校の主体性というか、先生の主体性だと思うのですが、最近は学校から言ってもらえるようにするような話があったと思いますが、もう少し詳しく教えてください。

【奥田室長】

私も現場にいたのですが、ケース会議や、1人の子どものことについて多方面から意見をもらうことをしようと思うと少しハードルが高い。与えられた35人の子を担当が見ている、学年が見ている、学校で何とかしよう、ここで何とかしようと思っている気持ちが強くて、それがなかったというふうに思っています。

私も管理職になって初めて、いやそれはダメだと、やっぱりもっともっといろんな人の力を借りてこの子たちを何とかしようと思わないとダメだということで、ケース会議などもどんどんして、学校の情報もどんどん外に出してやっていくことが、将来的にこの子どもを助けるためになるのだよと言ってきました。それが日野町に来させてもらって、そのケース会議もこっちからね、相談があってあの子のこと心配やねん、学校ちょっとケース会議とかしたらどうっていう声掛けを今まではしていたのだけれども、そうではなく学校が子どもを見ていて、この子でケース会議をしたいから相談センターの力を貸して、どこ呼んだらいいとか、ちょっとやんちゃしてるんだったら警察も呼ぼうとか、ちょっと悩んでるんやったら、もっと違うところ呼ぼうか、児童相談所呼ぼうとか、何かそんなことが言えるようにしていきたいと思ってます。このことは今年から始めたことではなく、去年の室長もそうおっしゃっていて、徐々にそうやってきたなというふうに、そんなことを思っています。

【赤尾担当課長】

実際に例えばある小学校は、私が関わるとなったら、この日とこの日とこの日でケース会議したいから調整つけてほしいという電話もきますので、特に今年はありがたいなと思っています。

【町長】

先生方の集まる研修などで、そういうふうに言ってくれてるのですか。

【赤尾担当課長】

センターでは、4月段階で各学校を回らせてもらって担当を決めてるので、そこでこういう動きをしてくださいね、私たちもこうしたいと思ってる、というような打ち合わせや、年間計画と一緒に組んでやっています。その中でぜひ言ってくださいと言っています。

【町長】

やっぱり子どもの最前線は学校で、家の中の振る舞いと違うので、担任の先生が一番最初に気づくことが本当にたくさんあるかなと思います。

ほかにありませんか。

では、以上をもちまして総合教育会議を閉じさせていただきたいと思います。

皆さんどうもありがとうございました。